

読書レディネスに関する研究

(報告3) 読書レディネス・テスト得点
上位群・下位群弁別項目の選定

安 岡 龍 太

A Study on Reading Readiness, Report III.
Selection of Items Discriminating between
Upper and Lower Groups in the Reading
Readiness Test

問題の所在

およそ子どもの精神発達にはいくつかの側面があり、しかも、それが相互に関連しているのである。このことを具体的に明らかにしている点で興味ある研究がある。それはいまから30余年ばかり前にソ連邦の Yudovich E. Ia. によって行なわれ、それからほぼ20年後に Luria, A. R. によって報告された研究である。この研究の対象になった子どもは言葉の発達が遅れた5歳の一卵性双生児であり、教育実験によってこの子どもたちの言葉の発達を促したところ、他の精神過程もそれに伴って発達したというのである¹⁾。

このように精神発達が相互に関連していることは読書レディネス (reading readiness) についても言えることであって、子どもの全面発達 (total development) が読書レディネスをも規定していると考えられるが²⁾³⁾、このことは子どもが知的、情緒的、社会的および身体的に成熟するまでは読みの指導 (reading instruction) を延期しなければならない

ということの意味しないばかりか、こうした「成熟優位の発達観」が読書レディネスを促進するための指導上の障害にすらなっているといわざるを得ない。

もちろんこの指導の問題は読書レディネスを構成している要因がなんであるかの問題から切り離して論ずることはできないので、まずなによりもこの読書レディネスを規定している要因を明らかにする必要がある。しかしながら、読書レディネスは多くの関連ある要因の複合体であると今までに言われているにもかかわらず、一変数実験がこの領域の研究に多く、多変数実験的研究は、筆者の知っている限りでは、英国の Potts の研究を除いてはほとんど皆無に等しいようである⁴⁾⁵⁾。

筆者の主な関心事は読書レディネスに関する多変数実験的研究ではあるが、本報告は読書レディネス・テスト得点の上位群（以下単に上位群という）と下位群（以下単に下位群という）を弁別する項目を選び出すために、この上位群と下位群についての8種類の検査の結果を分析するものである。

研 究 方 法

1. 被 験 児

神奈川県私立某幼稚園園児 231 名を被験者としたが、最終的には 197 名の資料が使用された。

2. 使用した検査

231 名に対して、つぎにあげる 6 種類の諸検査を昭和42年6月2日から翌年3月15日までにわたって筆者が実施した。

検査名	実施期間
ことばの聞き方テスト	昭和42年6月2日～7月1日
EIS 幼児知能検査	〃 6月14日～7月21日
読書レディネス・テスト	〃 9月9日～10月23日

田研式音楽素質診断テスト	〃 12月4日～43年3月15日
言語能力テスト	昭和43年3月7日～3月14日
体位測定	〃 12月8日～12日

さらに、上記の期間中に被験児の母親に対してつぎの検査を集団で一斉に実施した。

検査名	実施期間
社会成熟度診断検査	昭和42年7月5日～15日
幼児児童性格診断検査	〃 7月5日～16日
親子関係診断テスト	昭和43年3月6日～13日

3. 使用検査の内容

「ことばの聞き方テスト」は阪本一郎・鈴木清によって作成され、問題および指示はレコードにおさめられている。本テストの内容はつぎのようになっている。

1. 簡単なコトバを聞きとる力
2. 話を適確にききとる力
3. 話の要点をとらえる力

「EIS 幼児知能検査F型」は茂木茂八・小田信夫・安富利光共著の知能テストで、このテストの下位検査はつぎのごとくになっている。

1. 形態認識
2. 問題発見
3. 空間的洞察
4. 位相弁別
5. 数の抽象
6. 同類概括

「阪本D式読書レディネス診断テスト」は阪本一郎作成にかかるもので、その下位検査はつぎのようになっている。

1. 絵の指摘

2. 同形結合
3. 記憶結合
4. 文字認知
5. 眼球運動

「1959年改訂田研式音楽素質診断テスト」は田中教育研究所音楽研究部・小川一朗・茂木茂八・鈴木清によって作成され、問題および指示はすべてレコードに収められてある。このテストはつぎの下位検査から構成されている。

1. 強弱判断
2. 数・長短判断
3. リズム判断
4. 高低判断
5. 協和判断
6. 表現・鑑賞

「言語能力テスト」は阪本一郎・佐藤初重共著の幼児用知能診断テストの下位検査であって、体言と用言の理解をみる問題から成っている。

「体位測定」は身長・体重・胸囲・坐高を測定し、荻野忠則著体位検査法(日本文化科学社発行)によって身長発育度・重発育度・胸囲発育度・坐高発育度・栄養度・幅育度・広胸度・長脚度・発育度年令を算出した。

「田研式社会成熟度診断検査」は鈴木清著で、その下位検査はつぎのごとくなっている。

1. 社会生活能力
 - i. しごとの能力
 - ii. からだのこなし
 - iii. ことば
 - iv. 集団への参加
 - v. 自発性(自主性)

vi. 自己統制

2. 基本的習慣

i. 清潔・排泄

ii. 着衣・睡眠

iii. 食事

「幼児・児童性格診断検査」は高木俊一郎・坂本竜生共著のもので、この検査では個人的不安定の手がかりとして顕示性・神経質・不安傾向・自制力の欠如・周囲への依存性・退行性・反社会的攻撃性をとりあげ、社会的不安定の手がかりとしては友人・家庭・幼稚園における対人関係の安定性欠如を問題として、これに体質（身体反応過敏性）を基礎づけて診断しようとしている。

「親子関係診断テスト」は品川不二郎・品川孝子共著のもので、親の子どもに対する態度を拒否・支配・保護・服従・矛盾・不一致の各型について自己評価によって解答する質問 200 問から構成されている。

4. 整理の仕方

まず阪本 D 式読書レディネス診断テストの結果に基づいて被験児 169 名から上位群と下位群（全被験児の両端 25%）を選び出し、阪本 D 式読書レディネス診断テストを除いた 8 種類の検査（体位測定を含む）およびそれらの下位検査における上位群と下位群の差を点二系列相関によって検討した。すなわち、上位群では各検査およびその下位検査の得点が高く、下位群では得点が低いかどうかを点二系列相関によって検討した。なお、点二系列相関はつぎの公式から求められる。

$$r_{pb} = \frac{\bar{X}_p - \bar{X}_s}{u} \sqrt{p\varepsilon} \sqrt{\frac{N}{N-1}}$$

ただし

N は人数

P は上位群の総人数に対する比

ε は $1-p$

\bar{X}_p は上位群の平均点

\bar{X}_s は下位群の平均点

u は不偏分散の開平である

研究の結果

読書レディネス・テスト得点上位群と下位群の差は使用された各検査およびその下位検査の平均値によって検討され得るが、この平均差の有意性検査には2つの前提条件が仮定されていることは言うまでもない。すなわち、標本は母集団から無作為に抽出されるべきことと2つの母集団の分散は互いに等しいことが仮定されている。もし測定値の分散が正規型でないことが、たとえば、カイ自乗検定によって明らかにされるならば、測定値の正規化の手続をとらなければならない。また、もし第2の前提条件の分散の同質性が守られないならば、たとえばコ克蘭・コックス (Cochran-Cox) 法によって2つの平均値の有意差検定を行わなければならない⁶⁾。

ここではこのような整理の仕方をせず、ことばの聞き方テスト、EIS 幼児知能検査F型、社会成熟度診断検査幼児・児童性格診断検査、音楽素質診断テスト、言語能力テスト、親子関係診断テストおよび体位測定の8種類の検査別に上位群・下位群の差を点二系列相関係数によって検討した。

1. 各検査ごとの点二系列相関による検討

上記の8種類の検査（体位測定を含む）における両群の点二系列相関による分析の結果は表1のごとくである。

この表によると、知能、言葉を聞く能力、音楽に必要な基本的な感受能力、社会成熟度および言語能力の次元では相関がやや高く、個人的安定度の次元では相関がやや低い有意である。この結果から、読書レディネス診断テスト得点の上位群ではこれらの次元での得点が高く、下位群ではその得点の低いことがわかる。さらにいうならば、読書レディネス・テスト得点上位群と下位群とを弁別できる要因には知能、言葉を聞く能力、音楽

表 1 上位群と下位群の比較

テ ス ト		平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
		上位群	下位群			
ことばの聞き方テスト		52.59 (9.24)	44.91 (8.80)	.40	有	.01
EIS 幼児知能検査 F型		60.37 (12.25)	44.04 (8.36)	.57	有	.005
社会成熟度診断検査		135.73 (36.41)	113.69 (28.97)	.38	有	.005
幼児・児童 性格診 断 検 査	体 質	70.19 (19.07)	62.03 (24.83)	.18	無	.05
	個人的安 定度	53.32 (27.46)	44.89 (24.69)	.24	有	.025
	社 会 的 安 定 度	60.60 (26.12)	51.22 (24.41)	.18	無	.05
田研式音楽素質診断テスト		37.18 (4.60)	32.42 (5.98)	.40	有	.01
言語能力テスト		22.11 (2.78)	19.79 (2.97)	.32	有	.005
親子関係診断テスト		442.27 (200.79)	419.80 (205.30)	.06	無	.05
体位測定		479.14 (46.97)	460.45 (51.43)	.18	無	.05

的な音の感受性，社会性，語彙および情緒があることから，知的発達，情緒的発達，社会的発達，言語的発達などが読書レディネスに関係していることが明らかにされると考えられる。

2. 各検査下位検査ごとの点二系列相関による検討

1) ことばの聞き方テスト

この検査の下位検査別の上位群と下位群の比較は表2のとおりである。この表からわかることは，読書レディネス診断テスト得点の高い上位群は簡単な言葉を聞きとる力（テストのいう言葉をきいて正しく表象をつかむ，修飾語のついた言葉をきいて正しい表象をつかむ，および子どもをめ

表 2

下 位 検 査	平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
	上位群	下位群			
簡単な言葉を聞きとる	5.87 (1.75)	4.32 (1.94)	.39	有	.005
話を適確にききとる	4.69 (2.25)	3.83 (1.91)	.20	有	.05
話の要点をとらえる	3.78 (1.94)	3.30 (1.01)	.13	無	.05

ぐる日常の簡単な生活事象を言葉で理解できる) や話を適確にききとる力 (主語と述語との関係がはっきりわかる, 修飾語・補語・客語などがなにかかかわっているかがわかる, 接続詞や助動詞などの働きから時の経過・事の順序・物の推移・原因結果の関係などがわかる, 話をきいて簡単な動作ができる, および簡単な内容のものについて話をきいて, 出てくる人物・場面・進行を理解できる) の下位検査でも高い得点をとるということである。すなわち, 子どもの読書レディネスには, 聞く力のうちで上述の内

表 3

下 位 検 査	平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
	上位群	下位群			
形 態 認 識	7.21 (2.49)	5.17 (2.40)	.38	有	.005
問 題 発 見	7.08 (2.86)	5.06 (2.46)	.35	有	.005
空 間 的 洞 察	9.84 (2.90)	8.18 (2.53)	.33	有	.005
体 相 弁 別	7.21 (5.11)	5.58 (14.74)	.16	無	.05
数 の 抽 象	6.46 (2.41)	3.85 (2.37)	.48	有	.005
同 類 概 括	7.87 (3.32)	4.68 (0.56)	.52	有	.005

容をもった簡単な言葉を聞きとる力」と「話を適確にききとる力」が関係しているが、このことは必ずしも聞きとる能力が読書レディネスを規定する要因であることを意味しない。

2) EIS 幼児知能検査 F 型

表のように、同類概括・数の抽象・形態認識・問題発見（欠所発見）・空間的洞察（迷路）の下位検査で有意な相関が得られたことは、読書レディネス・テスト得点上位群が以上の5つの下位検査でも高得点であり、下位群が低得点であることを示している。

3) 田研式音楽素質診断テスト

表 4

下 位 検 査	平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
	上位群	下位群			
強 弱 判 断	7.05 (1.47)	6.52 (1.52)	.18	無	.05
数 ・ 長 短 判 断	5.99 (1.64)	7.26 (1.79)	-.35	有	.005
リ ズ ム 判 断	5.66 (1.75)	4.28 (1.56)	.38	有	.005
高 低 判 断	5.33 (1.17)	5.10 (0.97)	.09	無	.05
協 和 判 断	6.56 (1.35)	5.91 (1.44)	.22	有	.05
表 現 ・ 鑑 賞	6.28 (1.50)	5.26 (1.96)	.28	有	.01

表4の示すように、リズム判断、表現・鑑賞、協和判断および数・長短判断の下位検査で有意な相関が得られた。すなわち、読書レディネス診断テスト得点上位群はリズム判断、表現・鑑賞および協和判断の下位検査でも高得点であり、下位群は低得点であった。ただし、数・長短判断の下位検査では読書レディネス診断テスト得点下位群は高得点となった。

4) 言語能力テスト

表 5

下 位 検 査	平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
	上位群	下位群			
体 言 の 理 解	10.33 (1.84)	9.47 (2.02)	.12	無	.05
用 言 の 理 解	11.67 (1.52)	10.51 (1.85)	.32	有	.005

表5によると、用言の理解について相関が高く、有意な結果となっていて、読書レディネス診断テスト得点上位群が高い得点を取り、下位群が低

表 6

下 位 検 査	平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
	上位群	下位群			
身 長 発 育 度	61.21 (8.57)	56.32 (9.22)	.26	有	.01
体 重 発 育 度	57.13 (10.37)	52.44 (11.46)	.21	有	.05
胸 囲 発 育 度	55.91 (10.32)	54.48 (9.31)	.07	無	.05
坐 高 発 育 度	58.32 (8.08)	55.30 (7.69)	.19	無	.05
脚 長 発 育 度	59.58 (8.31)	55.70 (7.42)	.24	有	.025
栄 養 度	43.05 (9.59)	44.28 (11.89)	-.06	無	.05
幅 育 度	44.48 (8.63)	45.91 (11.42)	-.07	無	.05
広 胸 度	45.91 (10.09)	46.52 (9.74)	-.03	無	.05
長 脚 度	51.01 (8.81)	49.79 (7.56)	.74	有	.005
発 育 年 令	79.45 (12.13)	76.02 (9.65)	.16	無	.05

い得点をとっていることがわかるが、言語能力と読書レディネスとの関係をさらに厳密に分析するためには標準化された言語能力検査を用いる必要があることは言うまでもない。

5) 体位測定

表6に明らかのように、体位測定については、読書レディネス診断テスト得点上位群は長脚・度身長発育度・脚長発育度および体重発育度で有意な相関が得られた。このことは読書レディネス診断テスト得点上位群がこれらの4つの体位測定下位検査で高得点をとるのに対して、下位群が低得点をとることを示唆するものである。

6) 田研式社会成熟度診断検査

表 7

下 位 検 査	平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
	上位群	下位群			
しごとの能力	15.65 (2.88)	14.63 (2.84)	.17	無	.05
身体のかなし	16.37 (2.75)	15.86 (3.03)	.09	無	.05
言葉	16.98 (2.25)	15.96 (3.04)	.19	無	.05
集団への参加	17.29 (0)	15.86 (3.64)	.24	有	.025
自発性	16.88 (2.72)	16.27 (2.78)	.11	無	.05
自己統制	16.78 (2.27)	16.16 (2.61)	.12	無	.05
基本的習慣	54.33 (4.71)	52.59 (6.30)	.16	無	.05

表7から社会成熟度診断検査の下位検査「集団への参加」で有意な相関が得られたことがわかるが、このことは読書レディネス診断テスト得点上位群がこの下位検査で高得点を取り、下位群が低得点をとっていることを示している。

7) 幼児・児童性格診断検査

表 8

下 位 検 査	平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
	上位群	下位群			
顕 示 性	57.54 (26.11)	60.19 (22.78)	-.05	無	.05
神 経 質	54.62 (23.70)	41.83 (27.96)	.12	無	.05
不 安	58.56 (33.70)	49.58 (23.47)	.19	無	.05
自 制 力	70.81 (22.32)	65.09 (20.30)	.14	無	.05
依 存 性	58.15 (26.94)	51.22 (27.40)	.13	無	.05
退 行 性	62.64 (29.53)	51.22 (33.45)	.21	有	.05
攻 撃 性	63.87 (27.43)	56.11 (25.59)	.15	無	.05
社 会 性	61.62 (28.49)	56.32 (28.56)	.13	無	.05
家 庭 適 応	68.36 (21.35)	60.19 (52.56)	.16	無	.05
学 校 へ の 適 応	77.13 (21.28)	65.90 (27.41)	.21	有	.05

この検査の下位検査「退行性」および「学校への適応」で有意な相関が得られ、読書レディネス診断テスト得点上位群がこの2つの下位検査でも高得点をとったのに対し、下位群が低得点をとったことが明らかにされた。

8) 親子関係診断テスト

表9のごとく、この検査のすべての下位検査で有意な相関が得られなかった。

表 9

下 位 検 査	平 均 値		点二系列 相関係数	有意性	P
	上位群	下位群			
消 極 的 拒 否 型	35.40 (25.72)	32.13 (24.19)	.07	無	.05
積 極 的 拒 否 型	37.03 (24.37)	32.95 (22.73)	.09	無	.05
厳 格 型	43.56 (24.43)	46.42 (27.69)	-.05	無	.05
期 待 型	50.91 (31.43)	49.68 (32.82)	.02	無	.05
干 渉 型	41.11 (28.02)	42.74 (25.50)	-.03	無	.05
不 安 型	28.87 (24.19)	30.50 (25.23)	.03	無	.05
溺 愛 型	37.44 (26.36)	44.38 (28.91)	.12	無	.05
盲 従 型	53.36 (33.32)	47.64 (30.24)	.09	無	.05
矛 盾 型	45.17 (34.47)	39.89 (33.83)	.08	無	.05
不 一 致 型	53.77 (29.51)	43.97 (26.31)	.17	無	.05

最後に、読書レディネス診断テスト得点上位群を下位群から弁別する検査およびその下位検査を一覧表にすると表10のごとくになり、全部で25の項目が有意差のあることがわかったわけである。

表 10

項目番号	テ ス ト 名	有意差のある項目
1	ことばの聞き方テスト	ことばの聞き方テスト
2	EIS 幼児知能検査 F 型	EIS 幼児知能検査 F 型
3	社会成熟度診断検査	社会成熟度診断検査
4	幼児・児童性格診断検査	個人的安定度
5	田研式音楽素質診断テスト	田研式音楽素質診断テスト
6	言語能力テスト	言語能力テスト
7	ことばの聞き方テスト	簡単な言葉を聞きとる
8	〃	話を適確にききとる
9	EIS 幼児知能検査 F 型	形態認識
10	〃	問題発見
11	〃	空間的洞察
12	〃	数の抽象
13	〃	同類概括
14	田研式音楽素質診断テスト	数・長短判断
15	〃	リズム判断
16	〃	協和判断
17	〃	表現・鑑賞
18	言語能力テスト	用言の理解
19	体位測定	身長発育度
20	〃	体重発育度
21	〃	脚長発育度
22	〃	長脚度
23	田研式社会成熟度診断検査	集団への参加
24	幼児・児童性格診断検査	退行性
25	〃	学校への適応

考 察 (1)

以上のように、8種類の検査（体位測定を含む）のうち親子関係診断テスト、体位測定および幼児・児童性格診断検査の体質・社会的安定度を除いてすべての検査で読書レディネス診断テスト得点上位群が有意に高得点であるのに対して下位群では低得点であった。

1. 有意差のある検査のうち、ことばの聞き方テストについて、上位群が下位群よりも得点が高いことは、阪本D式基礎・読書力診断テストの因子負荷量を多くもっている下位検査のなかに絵の指摘（.81）があって、この絵の指摘のテストに成功するためには(1)ことばを聞く能力があること、(2)言われたことを理解できる能力、(3)聞いたことを短期間記憶する能力のあることなどが必要条件であることから明らかのように思われる⁷⁾。Launderville, S. M. F. は聞き方テストが従来の読書レディネス・テストと同様にその後の読書力を予測できることを見出していることがこの解釈を支える証拠になるといえよう⁸⁾。

2. EIS 幼児知能検査F型について上位群が下位群よりも有意に高い得点であることは従来の研究の結果とも一致する。たとえば、Wright, W. W. は Detroit 知能テストと Metropolitan レディネス・テストを 203名の被験児に用いて.73の相関係数を得た⁹⁾。したがって、読書レディネス・テストと知能テストは内容的に大同小異であり同じような内容を測定しているともいえる。しかしながら、知能のみが読書レディネスを規定する唯一つの要因だとはいえないし、また、読書レディネス・テストと知能テストを併用したら予測の精度が高められるかどうかは明らかではない¹⁰⁾。

3. 社会成熟度診断検査についても上位群が下位群よりも高得点である。このことは精神発達の各側面が相互に関連していることから当然と考えられるが、筆者の知る限りでは、社会的発達と読書レディネスとの関係についての研究はすくないようである。読書レディネスにとって意義ある

社会的発達の側面は自立心と集団活動への積極的にして協同的な参加であるといわれている。前者は学校生活への適応の前提条件であり、後者については学習が集団の中に行なわれるところから、反社会性や非社会性のために集団活動に参加できず、仲間はずれにされ、したがって、適切な学習ができないと考えられる¹¹⁾。

さきにもふれたように、精神発達の各側面は相互に関連しているので、もし社会的発達が促がされるならば、発達課題としての読書に対するレディネスも促進されるであろうし、逆に子どもに読書レディネスができていけば社会的発達もそれに伴うであろう。このように考えると、知的発達を促がすためのプログラムによって子どもの社会的発達をさらに進めていくことが重要になってくる。「健全な身体的、社会的および情緒的な発達に対しては、いつもの時代にも同じように、今日においても適切な注意が向けられねばならない。しかしながら、実はこのことだけではまだ完全であるとはいえない。というのは、現在、知的発達の面に関しては、3才から6才までの年齢の時期こそ、これまでに考えられてきたよりもはるかにたいせつなものであることが最近になってきわめて的確な事実として認められてきたからである。¹²⁾」今までどちらかという知育をあまり重視してこなかった幼稚園教育の体質改善の必要性が要請されるのである。

4. 幼児・児童性格診断検査の「個人的安定度」の内容は顕示性（ヒステリー性基調）、神経質（精神反応過敏性）、不安傾向、自制力、周囲への依存性、退行性および攻撃性からなり、この個人的安定度の低いことは情緒の成熟の乏しいことを示すものである。したがって、読書レディネス診断テスト得点上位群は下位群にくらべて情緒的に成熟していることになる。このことは Harrison, M. L.¹³⁾ が読書レディネスを促がす要因として情緒的安定度をあげていることと考え合わせて、子どもの読書レディネスがいかにそのパーソナリティとかかわりがあるかを示すものといえよう。

5. 本研究で田研式音楽素質診断テストを使用したのは聴覚弁別力を把握するためであったが、もし話音 (speech sound) に対する感受性を測定できたならば、その測定結果と読書レディネスとの関係を検討できたであろうが、音楽才能尺度を用いた研究が決してないわけではない。たとえば、Mange, C. V. は5種の聴知覚能力テストに Seashore の音楽才能尺度を用いて5つの能力と構音能力との関係を調べている¹⁴⁾。

いずれにせよ、音楽的な音に対する感受性の測定によって読書レディネス診断テスト得点上位群が高い得点をとったのに対して、下位群が低い得点をとったことが明らかにされたわけで、楽音のような非言語音 (non-verbal sound) に対する感受性も読書レディネスになんらかのかかわりがあるものと考えられる。

6. 本研究で用いた言語能力テストは、さきにもふれたように、阪本一郎・佐藤初重共著の幼児用知能診断テストの下位検査である。この下位検査は内容的には語彙テストといえるから、読書レディネス診断テスト得点上位群のほうがこの語彙テストで高得点をとっているといえる。したがって、言語の主要な側面の一つである語彙は読書レディネスに重要な要因であると考えられる¹⁵⁾。

この下位検査を用いたのは、言語のいくつかの主要な側面を測定できる標準検査がなかったからである。この実験が終わってから三木安正氏によってイリノイ心理言語能力検査 (Illinois Test of Psycholinguistic Abilities) の日本版が標準化されていることを知った。その日本版は発表にはなっていないので、その内容は不明である。しかしこのイリノイ心理言語能力検査 (ITPA) の原版の内容はつぎのごとくである。このテストは2才半から9才までの子どもの心理言語能力の特徴を調べるために作成されたもので、9つの下位検査からなっている¹⁶⁾。

I. 代表水準のテスト

1. 解号テスト (Decoding tests)

解号 (Decoding) とは聴覚および視覚シンボルを理解する能力である。

テスト 1. 聴覚解号 (Auditory Decoding) とは話し言葉を理解する能力である。

テスト 2. 視覚解号 (Visual Decoding) とは絵や書き言葉を理解する能力である。

2. 連合テスト (Association tests) ここで連合とは視覚または聴覚シンボルを意味のあるように関係づける能力である。

テスト 3. 視聴・音声連合 (Auditory-vocal Association) とは話し言葉を意味のあるように関係づける能力である。

テスト 4. 視覚運動連合 (Visual-motor Association) とは視覚的シンボルを意味のあるように関係づける能力である。

3. 構号テスト (Encoding tests) 構号 (encoding) とは思想を言葉またはジェスチャーに置きかえる能力である。

テスト 5. 音声構号 (Vocal encoding) は思想を話し言葉で表現する能力である。

テスト 6. 運動構号 (Motor encoding) は自分の考えをジェスチャーで表現する能力である。

II. 自動・系列水準のテスト

この水準のテストはシンボルを意味をもたせずに使うこと、主としてシンボル系列 (Symbol sequences) の長期把持と短期記憶とをみるものである。

1. 自動テスト (Automatic test)

われわれが一つの言語 (ゆたかな冗長さをもっている) を頻繁に使うと意識的に努力しないでも文章構造や活用を自動的に扱う習慣が身についてくる。話すときでも書くときでも、これらの自動的な習慣のおかげで人はメッセージの内容にだけ意識的注意をむけることができるが、他

方ではそのメッセージを表現するための言葉は自動的にでてくるように思われる。

テスト 7. 聴覚・音声自動能力 (Auditory-vocal Ability) この能力は過去の経験から将来の言語的事象 (Linguistic events) を予測するものである。

III. 系列検査 (Sequencing tests)

系列 (Sequencing) とは一系列のシンボルを正しく再現する能力である。

テスト 8. 聴覚・音声系列 (Auditory-vocal Sequencing) これはシンボルの系列を正しく反復する能力である。

テスト 9. 視覚・運動系列 (Visual-motor Sequencing) これは記憶から一系列の視覚刺激を正しく再現する能力である。

以上がイリノイ心理言能力検査 (ITPA) の概要である。ITPA 日本版の発表が一日も早いことを切望する。

7. 親子関係診断テストでは両群間に有意差がなかったが、子どもの社会的発達や情緒的発達が遅れている場合、そのよってきたる根拠を探るためにはその子どもの家庭環境、とくに親子関係を調べてみる必要がある。もし親の保護的態度から社会的成熟が遅れていることがわかれば、親子関係は間接的にはあるが読書レディネスに影響するものと考えられる。

親子関係を言語の次元から扱っている「親子言語関係診断テスト」が内須川洗氏によって試みられている¹⁷⁾。このテストは「拒否性」、「支配性」、「過保護性」、「服従性」の4つの下位テストからなり、さまざまな親子間の言語関係についての記述に対して「望ましい」あるいは「理想的」関係を被験者に問うものであって、読書レディネスを親子関係から吟味するのに有用のように思われる。この点において Milner, E. の研究は興味深い、読書レディネス得点の高い子どもの母親のほうが低い得点の子どもの母親

よりも子どもとの相互交渉で言語的であったというのである¹⁸⁾¹⁹⁾。

考 察 (2)

つぎに以上の7種類のテストのうちで有意差のあった下位検査について考察する。

1. ことばの聞き方テストのうち(1)簡単な言葉を聞きとる(2)話を正確に聞きとるという2つの下位検査で上位群が高い得点を取り、下位群が低い得点をとった。このことは、さきにもふれたように、子どもの聞きとる能力が読書レディネスを規定する要因だということにはならない。この点を明らかにするためには、先行変数としての聞きとる能力が後続変数としての読書レディネスを規定することを実証しなければならない。たとえば、子どもに聞きとる能力を開発するためのプログラムを子どもに試みてみて、子どもの読書レディネスが促進されるかどうかを検討するのである。このように先行変数と後続変数との関係を明らかにすることは行動の予測を可能にするものであって、理論的な関心事としてばかりでなく、教育実践の上からも重要なことである²⁰⁾。

2. EIS 幼児知能検査F型では形態認識（並んでいる4つの絵の中から同じもの2つをさがしだす）、問題発見（絵の中からどこかたりない所をさがしだす）、空間的洞察（迷路）、数の抽象（左の箱の中にあるものの数と同じ数のものを横に並んでいる箱の中からさがす）および同類概括（4つの絵の中から1つだけ異質なものを見つける）といった5つの下位検査で上位群が下位群よりも高得点であった。これは、阪本D式読書レディネス診断テストの内容、たとえば同形結合が形態認識と大同小異であることから首肯されるであろう。

3. 田研式音楽素質診断テストのうち、リズム判断、協和判断および表現・鑑賞の3つの下位検査で上位群が高得点を取り、下位群が低得点をとったが、数・長短判断の下位検査で下位群のほうが高得点であった。これ

は楽音に対する感受性についての結果であるので、さらに話音 (speech sound) に対する感受性と読書レディネスとの関係が明らかにされなければならない。その意味で Flower, R. の提唱する聴知覚技能のヒールキーは読書レディネス研究にとって基本的なものと考えられる。基本的な聴知覚技能が読書レディネスに重要な役割を果すものと考えられてはいるが、この技能と読書レディネスとの関係を明らかにした研究は殆んどないようである²¹⁾²²⁾。

4. 言語能力テストの下位検査「用言の理解」で上位群が高得点であったのに対し、下位群が低得点であった。これは、いわば語彙テストであるので語彙が読書レディネスの重要な要因であると思われる。

5. 全体としての体位測定は両群間では有意差を示さなかったが、身長発育度、体重発育度、脚長発育度および長脚度の4つの下位検査で有意差が認められた。この後者の所見は従来の研究結果と一致するが、読書レディネスの指標として身体的成熟を重視することは賢明ではないように思われる。

本研究に用いた全体としての体位測定値（両群間に有意差が認められなかった）はすべての下位測定値（そのうちには両群間に有意差のあるものもあった）を単に合計したものにすぎず、身体発育を総合的に評価したものではない。したがって、読書レディネス得点上位群と下位群を弁別できるように身体発育を総合的に評価するにはどうしたらよいかを考慮しなければならない。

6. 田研式社会成熟度診断検査については「集団への参加」という下位検査で上位群が高得点をとったのに対し、下位群が低得点であった。ここでいう「集団への参加」とは、いわゆる社会性の発達を示す指標ともいえるが、もっと多くの下位検査で両群間に有意差が認められなかったのは意外であった。

7. 幼児・児童性格診断検査について「退行性」と「学校への適応」と

いう2つの下位検査で両群間に有意差が認められた。「退行性」の下位検査で上位群が高得点をとったことをどう解釈するかはきめがたい。「学校への適応」が読書レディネスを促す要因であることは従来の研究の明らかにするところである。

方法論上の問題点

1. 本研究で用いられた検査の実施期間が約9ヵ月の長期（間に1ヵ月あまりの夏休みがあって、この期間には検査を実施しなかった）にわたったため、発達という要因をコントロールできなかった。したがって、この要因をコントロールするためには本研究のテスト・バッテリーがさらに短期間に実施されることが必要である。その意味で、被験児の母親評定にかかわる検査はできるだけ限られた短かい期間に集中的に実施するとか、体位測定をさらに早目に実施するとか、あるいは他のテストの協力を求めて実施期間をできるだけ短縮する必要がある（著者自身がことばの聞き方テスト、EIS 幼児知能検査F型、読書レディネス・テスト、田研式音楽素質診断テストおよび言語能力テストの5種類の検査を実施した）。ただ問題になるのは、いくつかのテストを実施される被験児への影響であるが、この点は実施に当って十分考慮を払うことが肝要である。

2. 読書レディネスに関係があると思われる要因を測定するテストを本研究のテスト・バッテリーに加えたり、あるいはこのテスト・バッテリーから不要なテストを除く必要がある。この研究を計画中にいくつかの心理検査をこのテスト・バッテリーに加えたいと思っていた。たとえば、就学レディネス・テストで既に標準化されたものが絶版になって入手できなかったり、幼児用の言語能力テストがわが国では標準化されていなかったりして、当然加えられるべき心理検査がこのテスト・バッテリーに加えられなかった。

3. 社会成熟度診断検査について両群間の有意差がもっと多くの下位検

査で認められるものと予想していたが、前述のように、ただ1つの下位検査のみが有意差を示すだけであった。この検査の代りに、両群間に有意差のある多くの下位検査を含みそうな他の社会的発達検査を用いるか、あるいは子どもの遊びの観察やソシオメトリーによって子どもの社会的発達を把握すべきであったかもしれない。この点とくに検討を要すると思われる。

4. 幼児・児童性格診断検査についても意外に両群間の有意差の認められる下位検査がすくなかった。この検査の質問への回答はすべて被験児の母親に依頼したので、幼稚園における子どもの行動についての質問への回答に信頼性があるかどうか疑問のように思われる。したがって、母親に回答を依頼する場合には、家庭での日常の観察に基づいて回答できるような項目から構成されている性格診断検査を用いるべきであったかもしれない。

今後の課題

1. まず本研究によって阪本D式読書レディネス診断テスト得点上位群と下位群との間に有意差のあることが明らかにされた25の変数の相関マトリックスに基づいて因子分析²³⁾または下層要因分析²⁴⁾ (substrata factor analysis) を試みてみる。

2. 本研究には阪本D式読書レディネス診断テストを用いたが、その後1971年に大西誠一郎氏によって読書レディネス・テストが標準化された²⁵⁾。今後計画される読書レディネスに関する研究にこの大西誠一郎氏の読書レディネス・テストをも加える。本研究に加えられるべくして加えられなかった心理検査がその後になって標準化された。たとえば、松原達哉氏によって就学レディネス・テスト²⁶⁾、三木安正氏によってイリノイ心理言語能力検査 (ITPA) 日本版が標準化された。これらの心理検査をも今後の研究のテスト・バッテリーに加える。

3. 幼児教育施設である幼稚園・保育所で子どもたちが経験することがすべて子どもの読書レディネスに影響を及ぼすものかどうかは明らかではないが、もし保育者が日常の保育の現場での子どもの観察によって子どもに読書レディネスができているかどうかを把握することができるような項目のインベントリーが作成されるならば、それは保育に役立つものと思われる。本研究によって読書レディネス・テスト得点上位群と下位群との間に有意差の認められた項目を別の被験児に実施してみて、この被験児に読書レディネスができているかどうかを明らかにするための交叉妥当化(crossvalidation)が今後のもう一つの課題になる。

4. 本研究には8種類の検査(体位測定を含む)を用いてきたが、前述のように、両群間に有意差のある下位検査は非常にすくなかった。親子関係診断検査、性格診断検査および社会成熟度診断検査ではとくにそのような下位検査はすくなかった。したがって、両群を弁別する多くの下位検査を見出すために一変数実験をすることが要請される。

5. 読書レディネスに関する研究に用いられるテスト・バッテリーに加えられべきテストの弁別力(この場合、読書レディネス上位群と下位群を弁別する)を検出するために、ベンダー・ゲンタルト・テスト²⁷⁾²⁸⁾、ケルン基礎達成テスト²⁹⁾³⁰⁾、WPPSI 知能診断検査(Wechsler Preschool & Primary Scale of Intelligence)³¹⁾などを用いて実験を試みてもみる必要がある。

6. 最後に、本研究によって読書レディネス・テスト得点上位群と下位群との間に有意差の認められた変数を用いて因子分析を行った場合には、本研究のすべての変数を用いて因子分析を行った場合に比較して、有意な情報量がすくなくなるのではないかという疑問が残る。この点を吟味するために、本研究で用いられた変数をすべて用いて因子分析を試みてもみる必要がある。と同時に他の研究領域にこの種の比較研究があるかどうかを確かめてみたい。

文 献

- 1) Luria, A. R. & Yudovich, F. Ia., (Translated by Simon, F), Speech and the development of mental processes in the child, Stoples Press, 1959.
- 2) Huus, H., Developing reading readiness, The Instructor, 74, 1965, 59—60.
- 3) Tyler, F. T., Readiness, 1062—69, Encyclopedia of Educational Research, (Ebel, R. L. (Ed.), 4th Edition. Macmillan, 1969.
- 4) 安岡竜太 読書レディネスに関する研究(報告1) 歴史的展望と今後の課題 慶応義塾大学大学院社会学研究紀要 1966, 7, 67—78.
- 5) Potts, E., A Factorial study of the relationships between the child's vocabulary and his reading progress at the infant's stage, British Journal of Educational Psychology, 30, 1960, 84—86.
- 6) 岩原信九郎 教育と心理のための推計学 日本文化科学社 1962.
- 7) 安岡竜太 読書レディネスに関する研究(報告2) 阪本D式基礎・読書力診断テストの因子論的研究 調布学園女子短期大学諸学研究会紀要 1969, 2, 96—104.
- 8) Launderville, S. M. F., A study of the effectiveness of a first-grade listening test as a predictor of reading achievement, Doctoral dissertation, Iowa city, Iowa: State University of Iowa, 1958, Listening bibliography (Sam Duker), Scarecrow Press, Inc., New York, 1964.
- 9) Wright, W. W., Reading readiness—a prognostic study, Bulletin of the School of Education, Indiana University, Vol. 12. (June 1936), 14.
- 10) Kottmeyer, W., Readiness for reading, Elementary English, Vol. 24, No. 6, 1947, 355—66.
- 11) Harris, A. J., How to increase reading ability, London: Longmans, 1961.
- 12) K. D. ワン 幼児の知育 明治図書 1968. 上野辰美訳
- 13) Harrison, M. L., Reading readiness, Cambridge: Houghton Mifflin Co., 1939.
- 14) Mange, C. U., Relationships between selected auditory perceptual factors and articulation ability, Journal of Speech & Hearing Research., 3, 1960, 67—74.
- 15) Smith, H. P. & Dechant, E. V., Psychology in teaching reading, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1962.
- 16) McCarthy, J. J. & Kirk, S. A., The construction, standardization

and statistical characteristics of the Illinois Test of Psycholinguistic Abilities, Institute for Research on Exceptional Children, University of Illinois, 1963.

- 17) 日本児童研究所 児童心理学の進歩 金子書房 1970.
- 18) Milner, E., A study of the relationship between reading readiness in grade one school children and patterns of parent-child interaction, *Child Development*, 22, 1951, 95—112.
- 19) Gage, N. L. (Ed.), *Handbook of Research on Teaching*, Chicago: Rand McNally & Co., 1967.
- 20) 三宅和夫 児童発達心理学 川島書店 1968.
- 21) McNinch, G., Auditory perceptual factors and measured first-grade reading achievement, *Reading Research Quarterly*, 6, 1971, 472—492.
- 22) Flower, R., The evaluation of auditory abilities in the appraisal of children with reading problems. In A. Figurel (Ed.), *Perception and reading*, Newark, Delaware: International Reading Association, 21—24, 1968.
- 23) 浅野長一郎 因子分析法通論 共立出版 1971.
- 24) Holmes, J. A., Factors underlying major reading disabilities at the college level, *Genetic Psychology Monograph*, 49. 1954, 3—95.
- 25) 大西誠一郎 読書レディネス・テスト手引 金子書房 1971.
- 26) 松原達哉 就学レディネス・テスト手引 日本文化科学社 1969.
- 27) 高橋省己 ベンダー・ゲシタルト・テスト 三京房 1968.
- 28) Koppitz, E. M., *The Benden Gestalt Test for young children*, Grune & Stratton, Inc., 1967.
- 29) 川口勇 編学齢成熟論集 三和書房 1968.
- 30) 川口勇 就学前教育 第一法規, 1968.
- 31) D. ウェクスラー 三木安正他共著 WPPSI 知能診断検査手引 日本文化科学社 1969.